著者プロフィール

野中亮介（のなか・りょうすけ）

昭和33年３月30日　福岡生。現在も在住。
昭和53年　「馬酔木」入門。水原秋櫻子に師事。秋櫻子没後は林翔、杉山岳陽の指導を仰ぐ。
昭和62年　「馬酔木」同人。
平成７年　第10回俳句研究賞・馬酔木賞受賞。
平成８年　福岡市文学賞受賞。
平成９年　『風の木』上梓。同著にて第21回俳人協会新人賞受賞。
平成13年　「花鶏」を創刊主宰する。
公益社団法人俳人協会評議員、日本文藝家協会、俳文学会各会員、福岡市文学賞選考委員、読売新聞よみうり西部俳壇選者

〈句集『つむぎうた』より転載〉〈2020年9月時点〉

『つむぎうた』（自選15句）

野中　亮介

山出づる真水のこゑや初硯
獅子舞の歯の根合はざる山の冷
ぜんまいの月の中まで伸びあがる
母の日の鳥に短き滑走路
盆提灯たためば熱き息をせり
白玉やはやくも濁る喪の心
子を征かせ母も逝きたり日向水
みづうみを渡りし雨や夏茶碗
乾かしてまた雨を行く遍路笠
どろどろと鰻を桶に落しけり
葛晒す上澄みの月捨てながら
三面は枯野へ開き能舞台
うすらひのこの世を離れはじめけり
純白の湯気立てて人愛すなり
綿虫や遠弟子として生きて来し